

# 運命論を問う



私たちは日常的に「それは運命だよ」とか、「天寿を全うしたね」などと言います。生まれながらにして人生が決定づけられているとするこの世界観は、運命論とか自然論、あるいは決定論などと呼ばれます。運命によって自然

的必然的に人生が決定づけられているという考え方だからです。運命論が話題に上るとき、私は「人間万事塞翁が馬」の故事を思い出します。

昔、塞（とりで）の傍に一人の翁が住んでいました。馬が逃げて落胆していると、ある日その馬が別の駿馬を連れて戻ってきました。幸運にも馬をもう1頭手に入れたのです。ある時彼の子息が、その駿馬から振り落とされて骨折をしてしまいます。駿馬が来なければこんな羽目にはならなかったと、さぞかし落胆したことでしょう。しかし子息は受傷したために兵役を免れ、命拾いをしたのでした。人生に起こる出来事は、幸運と思っていた事象が実は不運の始まりだったり、あるいはその逆も然りということで、この故事は眼前の事象に一喜一憂することの戒めになっているのです。この世界観の背景には、運命論が見え隠れするように感じられますね。塞翁の幸不幸が二転三転する背後には、自然の力が強く働いており、人知の及ばないところで塞翁らの生は運命づけられているように映るのです。

運命論に従う場合の生活スタイルは、例えば六朝時代の詩人陶淵明に見ることが出来るように思います。彼は自然と融合した生き方を貫き、それを多くの詩に残しました。自らの生は自然の変化に任せるという生死観を持っており、友人が浄土信仰に傾倒するのを横目に、彼は死後の世界を否定する現実主義者だったのです。その結果、彼は隠遁生活を理想とし、その生き様は代表作『五柳（ごりゅう）先生伝』に面白おかしく記されています。五柳先生は「短褐穿結し、箪瓢（たんひょう）塵々空（むな）しきも、晏如（あんじょ）たり（ボロを纏い飲食に不自由しても平然としている）」。「懐（おも）いを得失に忘れ、此れを以て自ら終る（営利主義から一線を画し、独り生を終えていく）」。陶淵明は日々の生活を飄々と送り、命をも自然の流れに身を委ねる考え方を貫きました。恐らくこれこそ運命論者の生活スタイルであろうし、老成した彼の感性は晩年終にこの精神性に達したのです。

ところが同じ運命論者でも、地域が異なると別の様相を呈してきます。紀元前5世紀前後の古代インド社会には、お釈迦さんと思想的に対立したマツカリ・ゴーサーラという思想家がいました。彼はやはり人生は運命的に決定づけられていると考えていました。しかし興味深いのは、ゴーサーラが苦行者だった点です。陶淵明は隠遁生活をしたものの、それは苦行ではありません。自然に身を任せただけです。一方ゴーサーラは裸行を常とし、牛糞を食べたり棘の上に座ったりする苦行を積極的に行ったと言われます。通常運命論者であれば、人生は運命的に決定づけられているのだから、自らの努力や行為で運命を変えることを諦めて、陶淵明のように身を任せる生き方に行き着くと思われれます。何故ゴーサーラは己に苦行を強いたのでしょうか。学問的に結論が出ていないこの問題は、運命論と苦行論の思想的融合の実例として、私たちに自らの生を見つめ直す機会を与えてくれます。

本邦では江戸期の儒学者らが中心になって、「敬（つつしみ）」や「誠」の中に生き方が探られました。この先人の思索は、現代の私たちの心の中にも美德観として根付いています。日本思想は日々の生き方に収斂され、不可知な運命論など「てやんでえい」とする文化が根底に流れているかのようです。確かに全てを運命論で説明されては、私も異議を唱えたくありません。良いことをすれば天国に行き、悪いことをすれば地獄に落ちるといふ、昔ながらの倫理のふるいは信じられるべきだと思うのです。冒頭に挙げた塞翁の故事で看過できないのは、話の中に塞翁の能動的な営為が何一つ表現されないという道教的側面です。主体が不在のまま、主観的価値としての幸不幸が転じられるのです。私はそうではなく、不運と思われる状況を幸運へと質的变化させる力学に、人間存在の一つの意義を見出したいし、逆に『平家物語』が憂う「盛者必衰のことわり」は、驕りや墮落の顛末と捉えたいのです。日本の伝統に見るように、ゴーサーラは運命とは別の地平において、世事に墮落することなく、自らを律するために日々苦行を実践したのではないのでしょうか。そうだとすれば、苦行者としてのゴーサーラに少しく好感を持つ一方で、陶淵明の生き方は多忙な現代社会に在る私たちにとって魅力的ではあっても、本質的に人間的ではないように思ってしまうのです。